

八バクク書

第一章 預言者八バククが示を蒙りし預言の重負ニエホバよ我呼はるに汝の我に聴たまはざること何時までぞや 我なんぢにむかひて強暴を訴ふれども汝は助けたまはざるなりニ汝なにとて我に害悪を見せたまふや 何とて艱難を瞻望居たまふや 奪掠および強暴わが前に行はる且爭論あり鬭諍おこる 四はによりて律法弛み公義正しく行はれず悪き者義しき者を圍むが故に公義曲りて行はる五 汝ら國々の民の中を望み觀おどろけ駭け汝らの日に我一の事を爲ん之を告る者あるとも汝ら信ぜざらん六 視よ我カルデヤ人を興さんとす 是すなはち猛くまた荒き國人にして地を縦横に行めぐり 己の有ならざる住處を奪ふ者なり七 是は懼るべく又驚くべし 其是非威光は己より出づ八 その馬は豹よりも迅く夜求食する豺狼よりも疾し 其騎兵は跑まはる 即ちその騎兵は遠き處より來る 其飛ことは物を食はんと急ぐ驚のごとし九 是は全く強暴のために來り 其面を前にむけて頻に進むその俘虜を寄集むることは砂のごとし一〇 是は王等を侮り君等を笑ひ諸の城々を笑ひ土を積あげてこれを取んニ 斯て風のごとくに行めぐり進みわたりて罪を獲ん 是は己の力を神とすニエホバわが神わが聖者よ 汝は永遠より在すに非ずや 我らは死なじエホバよ汝は是を審判のために設けたまへり 磐よ汝は是を懲戒のために立たまへりニ 汝は目清くして肯て

悪を觀たまはざる者肯て不義を視たまはざる者なるに何ゆゑ 邪曲の者を觀すて置たまふや 惡き者を己にまさりて義しきを吞噬ふに何ゆゑ汝黙し居たまふや 四 汝は人をして海の魚のごとくならしめ君あらぬ昆蟲のごとくならしめたまふ 五 彼鉤をもて之を盡く釣あげ網をもて之を寄せ集め引網をもて之を捕ふるなり 是に因て彼歡ひ樂しむ 一六 是故に彼その網に犠牲を獻げその引網に香を焚く 其は之がためにその分肥まさりその食饒になりたればなり 一七 然ど彼はその網を傾けつつなほたえず 國々の人を惜みなく殺すことをするならんか

第二章 我わが觀望所に立ち戍樓に身を置ん而して我候ひ望みて其われに何と宣まふかを見わが詭言に我みづから何と答ふべきかを見んニエホバわれに答へて言たまはく 此默示を書しるして之を板の上に明白に鏤つけ奔りながらも之を讀むべからしめよ 三 この默示はなほ定まれる時を俟てその終を急ぐなり 偏ならず若し遅くあらば待べし 必ず臨むべし 濡滞りはせじ 四 視よ彼の心は高ぶりその中にありて直からず 然ど義き者はその信仰によりて活べし 五 かの酒に耽る者は邪曲なる者なり 驕傲者にして安んぜず 彼はその情慾を陰府のごとくに濶くす また彼は死のごとし 又足ことを知す 萬國を集へて己に歸せしめ 萬民を聚めて己に就しむ 六 其等の民みな諺語をもて彼を評し 嘲弄の詩歌をもて彼を諷せざらんや 即ち言ん己に屬せざる物を積累ぬる者は禍なるかな 斯て何の時にまでおよばんや 嗟か

の質物の重荷を身に負ふ者よ七 汝を噬む者にはかに興らざらん
 や 汝を惱ます者醒出ざらんや 汝はこれに掠めらるべし八 汝
 衆多の國民を掠めしに因てその諸の民の遣れる者なんちを掠め
 ん是人の血を流ししに因るまた強暴を地上に行ひて邑とその
 内に住る一切の者にと及ぼせしに因るなり九 災禍の手を免れん
 が爲に高き處に巢を構へんとして己の家に不義の利を取る者は
 禍なるかな一〇 汝は事を圖りて己の家に恥辱を來らせ衆多の民
 を滅して自ら罪を取れり一一 石垣の石叫び建物の梁これに應へ
 ん二 血をもて邑を建て惡をもて城を築く者は禍なるかな三
 諸の民は火のために勞し諸の國人は虚空事のために疲る是は
 萬軍のエホバより出る者ならずや一四 エホバの榮光を認むるの
 知識地上に充て宛然海を水の掩ふが如くならん一五 人に酒を飲
 せ己の忿怒を酌和へて之を酔せ而して之が陰所を見んとする
 者は禍なるかな一六 汝は榮譽に飽ずして羞辱に飽り 汝もまた
 飲て汝の不割禮を露はせエホバの右の手の杯 汝に巡り來るべ
 し 汝は汚なき物を吐て榮耀を掩はん一七 汝がレバノンに爲た
 る強暴と獸を懼れしめしその殲滅とは汝の上に報いたるべ
 し是人の血を流ししに因りまた強暴を地上に行ひて邑とその
 内に住る一切の者にと及ぼししに因るなり一八 雕像はその作者
 これを刻みたりとて何の益あらんや 又鑄像および偽師は語は
 ん 偶像なればその像の作者これを作りて頼むとも何の益あらん
 や一九 木にむかひて興ませと言ひ 語はぬ石にむかひて起たまへ

と言ふ者は禍なるかな 是めに教晦を爲んや 視よ是は金銀に着
 せたる者にてその中には全く氣息なし二〇 然りとはいへどもエホ
 バはその聖殿に在ますぞかし 全地その御前に黙すべし
 第三章 シギヨノテに合せて歌へる預言者ハバククの祈禱二
 エホバよ我なんぢの宣ふ所を聞て懼る エホバよこの諸の年の
 中間に汝の運動を活齎かせたまへ 此諸の年の間に之を顯現し
 たまへ 怒る時にも憐憫を忘れ給はざれ三 神テマンより來り
 聖者パラン山より臨みたまふセラ 其榮光諸天を蔽ひ其讚美
 世界に徧ねし四 その朗耀は日のごとく光線その手より出づ
 彼處はその權能の隠る所なり五 疫病その前に先だち行き
 熱病その足下より出づ六 彼立て地を震はせ觀まはして萬國を
 戰慄しめたまふ 永久の山は崩れ常磐の岡は陥る 彼の行ひたま
 ふ道は永久なり七 我觀るにクシヤンの天幕は艱難に罹りミデア
 ンの地の幃幕は震ふ八 エホバよ汝は馬を驅り汝の拯救の車に乗
 りたまふ 是河にむかひて怒りたまふなるか 河にむかひて汝の
 忿怒を發したまふなるか 海にむかひて汝の憤恨を洩し給ふな
 るか九 汝の弓は全く囊を出で杖は言をもて言かためらるセラ
 汝は地を裂て河となし給ふ一〇 山々汝を見て震ひ洪水溢れわた
 り淵聲を出してその手を高く擧ぐ一 汝の奔る矢の矢のため汝
 の鎗の電光のごとき閃爍のために日月その住處に立とどまる
 二 汝は憤ほりて地を行めくり怒りて國民を踏つけ給ふ三 汝
 は汝の民を救んとて出きたり 汝の膏沃ける者を救はんとて臨

みたまふ 汝は悪き者の家の頭を碎きその石礎を露はして頸に
 およほし給へりセラ 四 汝は彼の鎗をもてその將帥の首を刺と
 ほし給ふ 彼らは我を散さんとて大風のごとくに進みきたる彼
 らは貧き者を密に呑ほろぼす事をもてその樂とす 一五 汝は汝の
 馬をもて海を乗とほり大水の逆巻ところを涉りたまふ 一六 我聞
 て腸を斷つ 我唇その聲によりて震ふ 腐朽わが骨に入り 我下體
 わなく 其は我患難の日の來るを待ばなり 其時には即ち此民
 に攻寄る者ありて之に押逼らん 一七 その時には無花果の樹は花
 咲ず 葡萄の樹には果ならず 橄欖の樹の産は空くなり 田圃は
 食糧を出さず 園には羊絶え 小屋には牛なかるべし 一八 然ながら
 我はエホバによりて樂みわが拯救の神によりて喜ばん 一九 主エ
 ホバは我力にして我足を鹿の如くならしめ 我をして我高き處
 を歩ましめ給ふ 伶長これを我琴にあはすべし